

特集 「9・11」以降、世界は変わったのか——地域研究の視点から ㊟アメリカ

「9・11」1周年のアメリカの不安

A Year after 9.11 : America's Uneasiness

森 孝一 MORI Koichi

一昨年の「9・11」、私は調査のためにサンフランシスコ近郊の大学町パークレーに滞在していた。10日間ほどの短い滞在であったが、「9・11」直後のアメリカを自分なりに肌身で感じる事ができた。あれから1年後の2002年9月、同じく短期間ではあったが、今回はアメリカ南部テネシー州のナッシュビルとチャタヌガを中心に調査を行い、「9・11」1周年のアメリカの様子を垣間見ることができた。

「9・11」はアメリカを大きく変化させた。アメリカは鉛のように重い不安の中にある。それは戦場が自国の本土である戦争を戦っていることから生じる不安である。日本からアメリカを見てみると、この点が十分に理解できない。私たちはイラク攻撃によって、アメリカは戦争に突入すると考えている。しかし、アメリカは一昨年の「9・11」以来、すでに「戦時下」にあるのだ。軍事的に並ぶもののない「唯一の超大国」であるアメリカは、自国の本土を戦場とする対テロ戦争の戦時下にある。アメリカの関心は何よりも、本土とそこに住む国民の安全を守ることである。アメリカの対テロ戦略と対イラク戦略は、この一点からのみ構築されているのであって、極論すれば、自国以外の世界は「二次」の事柄なのだ。同盟国との協調、イスラーム諸国によるアメリカへの協力は、本土へのテロ攻撃を防ぐために必要な要件であるが、協調や同盟はそれ自体が優先課題ではない。あくまでも自国防衛が目的である。「アメリカが攻撃された」、「アメリカは攻撃されている (under attack)」ということが、現在のアメリカ国民の心を支配している感情であろう。

「9・11」1周年の日、各テレビ局は一日中、特別番組を放映し続けた。1年前の世界貿易センタービルへのテロ攻撃を伝えるビデオが、その日、繰り返し映し出された。日本のニュースでは放映されなかった残酷な映像も多数含まれていた。燃え上がる世界貿易センタービルの窓から助けを求める人々の姿。灼熱の炎に耐えかねて、死へのダイビングを選択した人びとの落下する様子。「9・11」1周年の日のテレビは、1年前の惨劇の「細部」を再び描きだした。

このような惨劇は何もアメリカだけに限られたものではない。これまでにも、パレスチナで、アフリカ各地で繰り返されてきたのである。しかも、アメリカはそれらの予想された惨劇を止めようとはしなかった。それらの惨劇の「細部」は世界に報道されることはほとんどなかった。テロを産み出す要因として、経済的南北格差が指摘されるが、「情報における南北格差」の問題に目を向ける必要がある。アメリカ国民は「9・11」の細部につ

いて、繰り返し、大量の情報を与え続けられているが、世界のさまざまな地域における惨劇の細部については、ほとんど情報を与えられていない。

「9・11」1周年のアメリカには、今なお星条旗があふれていた。一昨年の「9・11」直後から、星条旗と並んで「神よ、アメリカを祝福したまえ」(God Bless America)という言葉がアメリカ社会に広く浸透した。「9・11」1周年の追悼集会は、世界貿易センタービル跡の「グランド・ゼロ」、ペンタゴン、そして乗客がハイジャック犯たちと格闘し新たなテロ攻撃を防いだ、その飛行機の墜落現場であるペンシルベニア州シャンクスビルの3ヵ所で行われた。三つの追悼集会でスピーチを行ったすべての人は、スピーチの最後をGod Bless Americaで締めくくった。

今年9月、テネシー州のいくつかの街で、ポスターやタクシーの屋根に付けられた広告板に、“In God We Trust, United We Stand”(神を信頼し、我々は団結する)という言葉が書かれているのを見た。In God We Trustはアメリカで使われているすべての硬貨に刻印されている言葉でもある。未曾有の国家的危機に直面し、大きな不安のなかにあるアメリカ国民は、星条旗と「神」(God)のもとに団結しようとしている。愛国心の高揚が、「神」への信仰という形で表現されるのは、アメリカの特質と言うべきであろう。

「9・11」1周年の日、私はテネシー州のチャタヌガからナッシュビルに車で移動した。同じ州にありながら、二つの街では1時間の時差がある。その途中で9年ぶりに、小さな田舎町デイトンに立ち寄った。デイトンは1925年に、公立学校で進化論を教えることを禁止した当時の州法をめぐって、有名な「スコープ裁判」が行われた町である。デイトンは9年前と何ら変わることなく、穏やかな表情を見せていた。現在でも保守的な「バイブル・ベルト」の町には、星条旗があふれかえっていると予想していたのだが、私の予想は外れた。もちろんまったくくないというわけではないが、ナッシュビルなどの大都会ほどのことはなかった。テロの恐怖、本土が戦場となることへの不安は、田舎よりもむしろ大都会の方が大きいのだろう。

つぎに3ヵ所で行われた「9・11」1周年追悼集会の内容を紹介することによって、アメリカが「9・11」の意味をどのように理解しようとしているのかについて考えてみたい。

ブッシュ大統領夫妻は3ヵ所の追悼集会のすべてに出席した。最初はペンタゴン、つぎにペンシルベニア州シャンクスビル、そして最後が「グランド・ゼロ」であった。三つの追悼集会全体を総合的に立案した人物や組織が存在したのかどうか不明である。ペンタゴンの集会の主催者は政府、あとの二つはそれぞれの市であった。しかし、三つの追悼集会は見事なコントラストをもって構成されていた。

ペンタゴンの追悼集会には政府の高官が多数出席し、式の形式は大統領就任式に見られるようなフォーマルなものであった。それはアメリカ軍の力と対テロ戦争への決意を表明するものであり、愛国心と宗教心が式の全体を支配していた。アメリカの団結と統合を示すものであったと言えるだろう。

これに対して、シャンクスビルと「グランド・ゼロ」での追悼集会は、遺族に対する配慮と癒しを中心としたものであった。式の形式はインフォーマルであり、ペンタゴンでの集会とは違い、ブッシュ大統領は演説を行わなかった。ペンタゴンでの集会が、アメリカの「統合」を表現したものであったとするならば、「グランド・ゼロ」の集会はアメリカの「多様性」を強調したものであった。

多様な人種的・民族的背景をもったニューヨーク在住の市民が二人ずつ交代で、世界貿易センタービルのテロで亡くなった二千数百名の犠牲者の名前を読み上げた。ヒラリー・クリントン上院議員、パウエル国務長官も、それぞれの公職によってではなく、一人の住民として朗読を担当した。映画俳優のロバート・デ・ニーロもその一人であった。「多様性」を容認しつつ、同時に、「統合」を実現しなければならないアメリカの宿命を「グランド・ゼロ」とペンタゴンでの追悼集会は見事に表現していた。これは意図的なものであったのか、それとも、そうではなかったのか。

ブッシュ大統領は1周年追悼集会において、大統領としての役割を十分に果たし、アメリカ国民にそれを印象づけることに成功した。ペンシルベニア州シャンクスビルと「グランド・ゼロ」の集会では、ブッシュ大統領夫妻は献花を行った以外は、遺族を慰めることにすべての時間を使った。参列していた遺族のもとを順に訪れ、肩を抱き、慰めの言葉をかけ、遺族の求めに応じてサインを行い、遺族と一緒に写真を撮った。シャンクスビルと「グランド・ゼロ」の両方の追悼集会で、ブッシュ大統領が遺族を慰めるために使った時間は、それぞれ1時間半を超えていた。CNN テレビのレポーターのジョン・キングはその光景を見ながら、「ブッシュ大統領は今日、大統領となった」とコメントした。アメリカ大統領は単なる政治的指導者ではない。日本の総理大臣と天皇の両方の役割を果たすことを期待されている。ホワイトハウスとブッシュ大統領は、その期待に十分に応えたと言えるだろう。

「9・11」1周年の長い一日は、ニューヨークの「自由の女神」の隣にある島、エリス島からのブッシュ大統領の国民に向けての演説で締めくくられた。テレビ画面の真ん中にブッシュ大統領、向かって左にはライトニングされた「自由の女神」像、画面の大統領の右には強い風にたなびく星条旗が、一つの画面内に映し出されていた。午後9時から始まった演説は7分間の短いものであったが、大統領就任演説と同様に、アメリカという国家の理想と存在意味を国民に対して語るものであった。ブッシュ大統領の演説はつぎのように要約できる。

アメリカへの攻撃は、アメリカを国家として成立させている理想に対する攻撃であった。その理想とは「自由と平等」であり、それが存在しているかどうか、いま戦っている敵とアメリカとの最大の相違である。この自由と平等を私たちに与えたのは創造主である。この文明を大量破壊兵器によって危うくするテロリストを決して許さない。正義が行われ、国家の安全が保障されるまで、手を緩めることはない。私たち

はイスラームの信仰を尊重する。しかし、その信仰を歪めて行動する者に対しては、私たちは戦う。私たちはいまこの時、神が私たちを一つにしてくださいることを知っている。今夜、ここで祈り求めることは、神が私たちに目を注ぎ続けてくださることだ。私たちの国家は強力である。しかし、私たちの大義は国家よりも偉大である (Our cause is even larger than our country)。その大義とは、人間の尊厳であり自由である。このアメリカの理想はすべての人類の希望である。これらを得ようとする希望が、何百万人もの人びとをこの港に引き寄せた (筆者注：演説しているエリス島は、移民としてやってきた人びとが、上陸までに一時収用された島であった。「自由の女神」像はニューヨーク港の入口の方向に向けて、松明を掲げている)。希望の光は、今なお、私たちの道を照らしている。光は闇のなかで輝いている。そして、闇は光に勝つことはない。神よ、アメリカを祝福したまえ。

「大義は国家よりも大きい」という言葉の意味するところは大きい。国家を超える理念や価値が存在するとブッシュ大統領は語ったのだが、彼はその意味を本当に理解していたのだろうか。人間の尊厳と自由を国家が抑圧している場合は、その国家も神の裁きのもとに置かれるべきであるという、リンカーンやキング牧師に代表されるアメリカの「もう一つの伝統」を、ブッシュ大統領は認識できているのだろうか。

「戦時下」の愛国主義の高まりのなかで、この「もう一つの伝統」についての発言の声は、ほとんど聞こえてこない。しかし、アメリカを変えることができるのは、アメリカ以外にはない。アメリカの「もう一つの伝統」の力に希望を置きたい。

もり こういち 同志社大学神学部教授